と直接生産者との分離を特徴としてもつていたのである。この発展を背景に、木地挽業から派生した自転車リム製造工業が近代工業としての面目をととのえてくる。わが国の土着産業が近代化に際して当面し、かつのりこえてきたさまざまの問題がここで提示されている。

全体として、明治以降に相当の紙数をさき、山中が元来有していた冬型の温泉という性格が近時春秋の行楽期型へと変つてきていること、浴客の地域分布が全国的に広がりつつあること、浴客数と景気変動との関係、観光宣伝の歴史的変遷等々が、わかりやすいグラフや写真で示され、「読ませる町史」の形をととのえている。これらは、現実の町政の指針として役立つであろうとともに、現代社会における温泉の機能を考える上に、甚だ珍重すべきデータの数々を提供しているやに思われる。（山中町史刊行会発行、昭和三四年一月刊、八八六頁）

（朝尾直弘）

劉　志　遠編
四川漢代画像磚芸術
重慶市博物館編
四川画像磚選集

画像磚についての要を得た説明は、岡田芳三郎氏が本誌四十一巻六号に述べておられるから（一六九頁）、参照して頂きたいが、その所で岡田氏も述べておられるように、未だ画像磚に対する本格的研究はなされていない。ここに取上げた物も、写真や拓影を録したに過ぎないが、ひごろ文献資料を使つて、漢から三国へかけての四川の歴史を考えている筆者にとつては、それはそれなりに、図を眺めていると、種々の事を感じさせてくれるので敢て紹介の筆を取つた次第である。

そこで何故に漢代の四川が斯くも重視されるのか、これらの書が、四川研究の上でどのような位置が与えられるのかということを明かにすることが、迂遠のようだが、却つて紹介には捷径ではないかと思う。

四川地方は前四世紀の末、秦の領土に入つて以来、開発が進められ、灌漑設備の完成、塩井の開鑿、商工業の進展は、この地方の経済的水準を著しく高め、豪族が生長し、三国蜀の独立をもたらすのである。史記の貨殖列伝には、この地によつて富を築いた幾人かの人の物語が記されているし、「華陽国志」という書は、漢代に豪族がどのように生長し発展していつたかということを述べている。所が最近の考古学的研究の著しい進歩は、更にその当時の姿を、具体的に示してくれるようになつた。格別に四川省出土のものは、上層階級だけでなく、その当時の一般の人々の生活の実態、特に生産の実情を示すものが含まれていることが特徴的なので、一段と注意されるのである。因に最近、岡崎敬氏が考古学雑誌四十四巻二号に「漢代明器泥象にあらわれた水田・水池について――四川省出土品を中心として――」と題して、明器泥象の面から、この特徴を論ぜられている。

四川省地方に対する考古学的調査は、すでに今世紀の初めから欧米人の手でなされていた。その後今回の日中戦争中国民政府の重慶遷都に伴い多くの学者がこの地に来り、考古学的調査が熱心に行なわれた。こうして今世紀の前半に発掘された画像磚は、Richard,

C. Rudolph; Han Tomb Art of West China.（California 1951）・聞宥「四川漢代画像磚集」・Chêng Té-k'un鄭德坤; Archaeological studies in Szechwan.（Cambridge 1957）などで我が国にも紹介されている。

さて新中国の誕生とともに、考古学的調査は益々組織的に行なわれるようになり、多くの遺跡・遺物が調査発掘された。この解放後発掘された画像磚を中心に紹介したのが、ここに取上げた書で、重慶博物館編『重慶博物館蔵四川漢画像磚選集』（一九五七・十二）（以下『重慶』と略称）は重慶博物館が蔵している八十七面の中、四十面を採録したもので、中二面のみが解放前のものである（序文及び巻末表）。この書は右頁に図版を置き、左頁にその説明を記す体裁を取り、内容によって次の四つに分けて並べている。すなわち、一、生産居室類（七画）二、生活享楽類（十画）三、車馬出行類（十九画）四、墓闕墓神類（四画）である。そして巻末に重慶市博物館館蔵漢墓画像磚巻号表を附して、出土地、出土或は蒐集年月等を明かにしている。

次に劉志遠編『四川漢代画像磚芸術』（一九五八・七）（以下『劉』と略称）は四川省博物館所蔵のものに、四川大学博物館・重慶市博物館及び個人所蔵のものを加えて七十六面が採録されている。ただしその中には解放前発掘のものが半数近くあり（三十二画）、「重慶」と重複するものも当然存在する（十四画）。その上これは両者に通じて言えることだが、解放後の出土品でも、その内容が解放前に発掘され、我々の目に触れているものと同一のものもあって、新しい内容を持つものは案外に少い。このことは、今後発掘がつづけられても、こと画像磚に関する限り、そう目新しい内容を持つものが出ないのではないかということすら感ぜしめる。それはさておき、この書の構成は、最初に四川漢代画像磚芸術概論があり、次いで図版を並べ、最後に説明が附されている。図版は概論の内容から見て、「労働人民の生活」「支配階級の生活」「舞楽百戯」「建築芸術」「神話伝説と樹木花鳥」の順に分類して並べたようである。

ここではその全部については説明できないから生産に関するもの若干について述べて見よう。製塩（『重慶』1・『劉』3・4）「劉」の方は二つとも解放前のもの。「重慶」のは解放後のものだが内容は「劉」に同じ。ただ「劉」の方では欠けている右上の部分には、山が描かれそこに鳥・獣のいることが「重慶」のものから分る。狩猟と収獲（『重慶』2・『劉』1）両者とも内容は同じだが重慶の方は解放後のもの。以上三者は Rudolph にも見えている。採蓮（『重慶』3）池の中に舟を浮べて蓮を採っている。池中には水禽がおり池の向うの山にも鳥が見える。採芋（『劉』5）池中に芋が栽培され、魚・鳥の游いでいる中で、四人の男が芋の収獲に従事している。桑園・（『重慶』4）採桑（『劉』6）四川は養蚕も盛んな地で、宅の前後には桑を植えていた。採桑の図は開宥のには採桐として載せられていると説明されている。農作（『劉』2）六人の男が方形に区切られた田で働いている図。劉氏は、この図は収獲とも播種とも考えられるが、「祭祀霊星舞」（農作を題材とした舞）という説もあると解説で述べている。その他穀物倉の前で米を舂いている図（『劉』7）や、穀物を借りに来ている図（『劉』11・12）、庖厨（『劉』8）、醸酒（『劉』9）、市場の図（『劉』10、Rudolph に見える）などがある。

以上、生産の場を画いたものを取り上げた

のは、前にも述べた如く、それが四川の画像磚にのみ特徴的な主題であるからである。またこれが明器泥象についてもいえることであり、文学作品では奴隷の日常生活を主題とした「僮約」を産み出したことなどと併せ考えるとき、何かそこに漢代の四川の風潮を窺わしめるものがあるように思う。

しかしこうした主題を扱つたものは、全体の数から言えば少いので、多くの物は、当時の豪族の生活を主題とし、神話伝説を題材としている。この種のものは、広く漢の絵画を考える時、より普遍的な題材なのであつて、これも他の考古学遺物と併せ考察すると、そこに漢文化の普及度――それが或は点的な繋りであるとしても――が攷究されるであろう。ただあれほど、自分達と身近かな農村の実態を取り上げた画像磚の制作者達が、この地方に語り伝えられた伝説を題材としたものはついに一片も残さず、西王母や伏羲・女媧を描いたのも、亦注意すべき現象であろう。

（狩野直禎）

学界消息

史学研究会関係

史学研究会七月例会

七月四日　午後　於京大文学部第一教室

大和朝廷と古代豪族　岸　俊男氏

ローマの美術を訪ねて（スライド使用）　毛利　久氏

織田理事・水野理事・羽田評議員の学術調査

「京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊」は、七月より来る十一月迄の予定で学術調査中であるが、本会理事水野清一氏は隊長として、織田武雄理事は地理班、羽田明評議員は歴史言語班として参加された。なお団員は次の通りである。（隊長）水野清一、（考古美術班）水野清一、田中重雄、林巳奈夫、岡崎敬、（地理班）織田武雄、末尾至行、（歴史言語班）羽田明、井本英一、（人類班）岩村忍、吉田光邦、藪内清。

国史関係

読史会七月例会　七月一一日（土）

午後一時　於京大陳列館演習室

明治三十年の労働運動　山本　四郎

文化史と唯物史観　三品　彰英

大阪歴史学会春季大会

六月二一日（日）　於大阪大学南校

〔古代中世の部〕

弥生式文化期における六甲山系高地性遺跡について　村川　行弘

律令官制における皇親勢力について　直木孝次郎

八・九世記における私出挙をめぐつて　吉田　晶

摂関制下の武士　上横手雅敬

平安末期の国衙と在地勢力　工藤　敬一

〔近世近代の部〕

元和期における幕領の貢租　朝尾　直弘

享保期の学問と教育――三宅石庵と中井甃庵――　大月　明

近世河内狭山池の溜池分水　福島　雅蔵

士族叛乱の社会的背景――とくに土佐藩の場合――　後藤　靖

近世西摂における「農民層の分解」　山崎　隆三

東洋史関係

東方学会

インド仏蹟踏査隊報告講演会

六月十九日（金）午後七時　毎日新聞京都